

<研究ノート>

## 神聖ローマ皇帝カール4世の自叙伝

—翻訳と註解 (9) —

小松 進\*

### The Autobiography Written by Holy Roman Emperor Charles IV

—Translation into Japanese and Commentaries (9) —

Susumu KOMATSU \*

#### 1. はじめに

カール4世は、現代人によって国家と呼ばれる政治構成体がいまだ形成される以前の中世後期に生きた。その時代に皇帝としてカールが君臨した組織体は、後世、神聖ローマ帝国と通称されるが、それは国民国家ならぬ、多民族で構成された複合体で、中央行政機構はもとより、首都すら存在しない、組織の中核なき異形の姿をしていた。近代国家の概念では把握しきれないこの奇妙な組織体のあり方について、近代の歴史学はさまざまな解釈を試みてきた。だが、その試みで歴史学者が直面するのは、近代人のもつ思考の枠組みの一面性であり、時代制約性である。歴史学は自分の生きている時代の出来事や事象の原因を過去に遡って突き止める営みであるばかりでなく、自分の時代そのものを相対化して、時代に制約された思考の枠組みの限界を自覚し、今在る現実世界とその表象体系を根底から見つめ直す作業でもある。

近代の国民国家の形成を歴史の到達点とみなす歴史観によれば、神聖ローマ帝国は克服されるべき過去の遺物でしかない。しかし、この帝国が近代国家とはまったく異質であるがゆえにこそ、むしろ、その研究は、近代国家とは何か、さらには、国家とはそもそも何か、という根源的な問題の前に歴史学者を立たせる。カールの自叙伝は、現代人の目にはいささか不可解なこの帝国のありし日の姿、後世の研究者によって未だ解釈の手が加えられていない歴史の生々しい現実を垣間見させてくれる。

本稿で訳出するのは、自叙伝の第9章と第10章である。そこに描き出されるのは、ドイツと帝国領イタリア（ロンバルディーア）で際限なく繰り返される戦乱であり、権力闘争が常態と化した平和なき無秩序な世界である。この秩序なき混沌にカールは身を投じ、果てしのないその動乱に翻弄される。第9章と第10章の梗概は、以下の通りである

---

\* 筑波学院大学経営情報学部、Tsukuba Gakuin University

## 第9章

- ・反ルクセンブルク陣営（皇帝・オーストリア・ゲルツ伯・ロンバルディーア諸都市）との戦い
- ・オーストリアとの和議
- ・リトアニア遠征
- ・ロンバルディーアにおける対マステイーノ・デッラ・スカウラ戦争の勃発
- ・ヴェネツィアにおけるカールの窮地

## 第10章

- ・対マステイーノ・デッラ・スカウラ戦争
- ・対マステイーノ・デッラ・スカウラ戦争へのカール参戦
- ・ベッルーノ、フェルトレ、パードヴァ市の制圧
- ・ハンガリーとの同盟
- ・帝国南部における蝗害

14世紀前半に帝国を取捨のつかない戦乱へと陥れた最大の要因は、三大有力家門の鼎立とその勢力拡大政策の激突であった。三大家門とは、ハプスブルク家、ルクセンブルク家、ヴィッテルスバッハ家である。これら三家門の対立を誘発したのは、帝国における選挙王制の不安定さである。13世紀後半のいわゆる大空位時代以来、帝国内の秩序回復のために、国王選出を担う7人の選帝侯が実質的に固定された（帝国法で、7人の選帝侯の地位は、カールが1356年に発布した金印勅書で正式に確定する）。しかし、自己の勢力拡大を阻む強大な王権を望まぬ選帝侯たちは、大空位時代以前のシュタウファー朝のような世襲王朝の出現を阻止し、比較的弱小と思われた家門から国王を選び、世襲化の危険を避けてそうした諸家門の間で王位をたらい回しにした。こうした選帝侯たちの利己的行動こそ、上記の三家門の抬頭を促したのだが、選帝侯たちの思惑に反して、三家門は積極的に勢力拡大政策を展開し、やがて選帝侯たちを凌駕する力を手にして、帝国の運命を左右す

る主役にのし上がった。これら三家門の勢力拡大に絶好の機会を提供したのが、帝国東部で起きた大変動である。帝国東部では、北からブランデンブルク辺境伯領、チェコ王国、オーストリア公領、ケルンテン公領、ティロール伯領などにおいて、短期間のうちに相次いで伝来の領邦君主一族の男系継承者が絶え、権力の空白状況が生じた。こうした空白を埋めるように帝国西部から三家門が進出し、これら空位となった領邦をめぐって激しい争奪戦を繰り広げる。このように、三大家門の間に生じた国王選挙をめぐる権力闘争、そして、帝国東部を主要な舞台とする家門勢力拡大政策の激突が、自叙伝におけるカールの叙述の政治的枠組みを形づくっている。自叙伝の細部を理解するには、こうした大きな政治的枠組みの俯瞰を前提とする。そこで、本稿では自叙伝の第9章と第10章を訳出するとともに、三家門が抬頭する背景とそれぞれが企てた家門政策を解説したい。ルクセンブルク家についてはすでに詳述したのでは、ここでは三家門の中で最初に頭角を現すハプスブルク家を取り上げる。

## 2. 自叙伝第9章（翻訳）※

（ティロール伯領の後見を託された）のち、余は復活祭の翌日<sup>1)</sup>、ティロール伯領で兵を募り、ゲルツ伯<sup>2)</sup>を討つため、ブリクセン司教区にあるプスタータールに入り、ザンクト・ランプレヒツベルクの城を落とした。さらにゲルツ伯討伐の手をゆるめず、伯の領土に侵攻しリエントと呼ばれる隘路まで兵を進めた。こうして、余と軍勢は3週間を戦場で過ごし、敵地を蹂躪したのである。というのも、ゲルツ伯がわれらの宿敵オーストリア公に加担していたからである。

殉教聖人ゲオルギウスの日の翌日<sup>3)</sup>、わが父はオーストリア公オットー<sup>4)</sup>をドナウ河の彼方へ撃ち払い、オーストリア領内の城砦

をあまた奪い取った。これに対し、皇帝のごとく振る舞っていたルートヴィヒ<sup>5)</sup>は、オーストリア公兄弟<sup>6)</sup>を援けようとし、その結果、ドイツ全土とロンバルディア諸都市の支配者たち、就中、ヴェローナ、ヴィチエンツァ、パードヴァ、トレヴィーゾ、プレーシャ、パルマ、ルッカ諸都市の支配者であるマステイーノ・デッラ・スカーラ<sup>7)</sup>もルートヴィヒに同調した。これら敵たちは総力をあげて余とティロール伯領に襲いかかろうとし、こうして、トレント市とアーディジェ河谷一带はロンバルディア人により、由々しき危機に陥った。また、イン河谷では、バイエルン人とシュヴァーベン人によって抜き差しならぬ脅威にさらされ、かくして、ティロール伯領全土がさながら四面楚歌のような窮地に立たされることになったのである。

この時期である。余は、ブルノ出身でわが書記官長のミクラージュ<sup>8)</sup>をトレント司教に、わが弟<sup>9)</sup>の宮廷司祭でマテウス<sup>10)</sup>の申す者をブリクセン司教に据えた。当時、両司教職とも空位だったからである。

その年の夏<sup>11)</sup>、皇帝のごとく振る舞っていたルートヴィヒが、ドイツの全諸侯と共に、わが義兄のバイエルン大公ハインリヒ<sup>12)</sup>に向けて大軍を繰り出した。ハインリヒが、当時、わが方の陣営に与していたからだ。さらに、オーストリア公がパッサウ経由でルートヴィヒの援軍として馳せ参じた。一方、わが父もハインリヒの救援に駆けつけ、ランダウ市近くの川<sup>13)</sup>の前に陣を構えた。そこへ、オーストリア公と他の諸侯を従え、ルートヴィヒが大軍を率いて現われた<sup>14)</sup>。だが、川がその軍勢の接近を阻み、ひと月バイエルン<sup>15)</sup>を荒らしまわったのち、ルートヴィヒとオーストリア公は、大公ハインリヒの軍勢が劣勢だったにもかかわらず、自らの目論見を果たすことなく自領へ退いた。ところで、その折、余もまたティロール伯領から騎士と歩兵を多勢引きつけて、わが父と義

兄の救援に赴こうとしたが、クーフシュタイン<sup>16)</sup>で行く手を阻まれた。そこにはルートヴィヒの息子<sup>17)</sup>がいたからで、くだんの諸侯たちが戦場で対峙していた間、わが軍勢はその地で彼を攻囲した。しかし、両陣営が陣払いをしたとき、余もまたティロールに兵を戻した。

そののちミカエル祭の頃、わが父とオーストリア公との間で和議の交渉がなされた<sup>18)</sup>。わが父が娘<sup>19)</sup>の嫁資として与えたズノイモ市をオーストリア公は返還して父に多額の金銭を支払い、わが弟のティロール伯領にはドラウ河畔の城砦をいくつか譲渡する一方、ケルンテン公領はオーストリア公の所有に帰すべきことが、そのとき取り決められた<sup>20)</sup>。

同じくその年の冬<sup>21)</sup>、リトアニア人を討つため、余はわが父に同行してプロイセンに出征した。その地で余たちと合流したのは、若きホラント伯ウィレム<sup>22)</sup>、ベルク伯<sup>23)</sup>、若きローツ伯などあまたの伯や領主たちだった。だが、その年の冬は、結氷が見られぬほど暖かった。そのため、リトアニア人に対して兵を進めることができず、我々はめいめい自領へ引き返した。

ところで、ロンバルディア人たちの間で激しい戦争が勃発し、余もまたティロールを発つ前にその戦争に巻き込まれていた。戦争の原因は、ヴェネツィア人、フィレンツェ人、ミラーノ人、フェッラーラ人、マントヴァ人、ボローニャ人などあまたの都市が、ヴェローナとパードヴァの支配者マステイーノ・デッラ・スカーラを打倒すべく同盟を結んだことにあり、そしてマステイーノが余にとっても宿敵であったことは前述のとおりである。

そこで4月<sup>24)</sup>になるや、ロンバルディアに入ろうとし、余はモラヴィアを経由してオーストリアへ向ったが、オーストリア公は余たちに道中の安全を保障してくれなかった。さればと、船に乗り込みハンガリー国王



の許に赴けば、国王は、ブダ市からハンガリー、クロアチア、ダルマティアを經由して、海<sup>25)</sup>に臨むセニ市に至るまで、余たちに道中の安全を図って下さり、そのセニ市から余たちは海へと乗り出したのである。そのことを、ヴェネツィア人の艦長たちが知ると、余が味方であるにもかかわらず、余たちを捕虜にしようと企てた。かくして、余のガレー船をヴェネツィアのガレー船隊が取り巻き、わが船は逃げ場をまったく失ってしまった。それから9日目、ヴェネツィア人のグラード市目前に迫ったとき、余のガレー船に同乗していた、クルク<sup>26)</sup>とセニのバルトロメウス<sup>27)</sup>の策を容れ、余はヴェネツィア人たちにこう言うよう家臣たちに命じた。「ご貴殿方、ご覧のとおりです。われらはご貴殿方の掌中からけって逃れられぬことを承知しております。あらかじめ市<sup>まち</sup>に使いを送り、われらを市<sup>まち</sup>へいかに迎え入れるべきかを協議なされるがよかろう」と。家臣たちが巧みな物言いでヴェネツィア人と渡り合っていたその間に、余はバルトロメウスとヤン・ズ・リバー<sup>28)</sup>と共に、ガレー船のハッチをとおって小さな漁船に飛び降りた。そして、袋と網の下に身を隠しながらヴェネツィア人のガレー船隊の間を縫って進み、葦をかき分け船着場へと辿り着いた。こうしてヴェネツィア人の手中に落ちるのをまぬがれ、余たちは徒歩でアキレーイアに向ったのである。一方、ヴェネツィア人はわれらのガレー船を家臣もろとも拿捕したが、数日間彼らを抑留したのち釈放した。さて、アキレーイアにいるとき、余は宿主に身分を明かし、その宿主はさっそく市参事会に報告せ、市民たちは総大司教<sup>29)</sup>にまで事の次第を告げるに至った。総大司教は時を移さず市内に足を運んで余たちを歓迎し、聖職者と民衆から惜しめない敬意を受けて鐘が打ち鳴らされる中、余たちをその宮殿へと導き入れて下さった。このようにその地で、総大司教は

4週間にわたって余たちをこの上なく丁重にもてなし、わが家臣たちも捕虜の身から解放されて余たちに合流したのち、総大司教は余と盟約を交わして、余たちに、カドーレ溪谷經由でティロール伯領まで護送する便宜を図って下さった。このティロール伯領は、当時、年端も行かぬ弟に代わり、余の統治していた領地である<sup>30)</sup>。

### 3. 自叙伝第10章 (翻訳)

さて6月<sup>31)</sup>に、ヴェネツィア人、ミラーノ人、マントヴァ人、フェッラーラ人とその同盟諸市がパードヴァ市を包囲した。寄手は甲冑騎士およそ一万、歩兵はその数知れずという大軍だった。また、同盟軍の一部はフェルトレ市とフェルトレ司教シッコネ・デ・カルディナーツィオ、及びセニの伯たちとカミーノの領主たちを包囲した。その軍勢は兜武者五百と多数の歩兵からなり包囲は長期に及んだ。と云うのも、パードヴァとフェルトレの両市は、ヴェローナの支配者で他にも先に列挙した数々の都市を傘下に収めるマティーノ・デッラ・スカラの支配に服していたからである。しかも、ヴェネツィア人はマステイーノの支配に留まっていたコネリアーノ、セッラヴァッレ、バッサーノをすでに奪い取り、トレヴィーゾのポデスタ<sup>32)</sup>であるコラルト伯や他にも数多くの者たちがマステイーノに叛旗を翻し、ヴェネツィア側に寝返っていた。

ベッルーノ市の市民でスドラキウス・デ・ボンガージョと申す者も、フェルトレ市が同じように攻略され、その結果、ベッルーノもヴェネツィア人の手に落ちることを危惧していた。と云うのも、彼はとりわけヴェネツィア人を嫌悪していたからだ。そして、四面楚歌の窮地にあることを悟ると、彼はヤーコポ・ダヴォスカーノ<sup>33)</sup>のことを思い起こした。ヤーコポはすでにブーデンシュタイン



やベッルーノ領内にある幾つかの山砦とともに、余の支配に服し、余の味方になっていたのである。余はヴェネーツィア人とヴェローナ人の両陣営に対抗する方策を小さな船で協議することにした。スドラキウスはヴェローナの支配者を裏切るつもりで、ヴェネーツィア人とマステイーノに気付かれぬよう人目を忍んで余に会いに来た。そして、こう進言した。「殿下が勝利を収め敵軍をフェルトレ市から追い払うことができますなら、それがしは市の城門のひとつを殿下のためにお開き致しましょう。それがしはこの市で他の誰よりも殿下を望んでいるからです」。余はスドラキウスの進言に耳を傾け、気取られずに余が市に到達する期日を彼に告げた。

余は周到に人を集めねばならなかった。アーディジェ河畔のエーニャ司教区で二人の貴族が決闘するという事件が起きたため、二人の仲間たちが何かいざこざを起こした場合に決闘に臨む二人を保護するという口実で、余は多数の貴族を呼び集めた。これで、何ゆえに人々を招集するか悟られることなく、余はひそかにフェルトレ市へ兵を進めることができる。さて、その決闘で闘いを制し相手を斃した勝者に余は騎士の剣を佩かせた。これが済むと、そこに居合わせた軍勢に、どこへ向かおうとしているかは聞かず、是非とも余につき従うよう要請した。すると、一同は乗り気になり、さっそく余に従って遠征の途につき、馬に跨がり夜を徹してフィエンメ谷を突き進むことになったのである。翌日、馬はカストロツァを通過する人跡まれな山路にさしかかった。そこは普通なら馬で迎える者などいない路だった。やがてカストロツァとプリミエーロの間に横たわる森林に突き当たったが、木々が根こぎにされ路のありかがわからなくなり、わが軍は意気消沈した。そこで、余は馬を下り、徒武者を幾人か引き連れ、山々や荒れ果てて久しい旧山路の難所に分け入って路を捜し、どうにか森を踏破した。森

の番卒たちは日が暮れたのですでに帰途につき、森で自分たちに何者からの脅威や危険が迫っていることなど思いもよらなかったのである。こうして、余は自軍のため山中に路を切り拓いた。軍勢が余の後を追ってプリミエーロの城砦に辿り着くと、そこもヴェネーツィア人たちに包囲されていたが、わが軍は敵軍を蹴散らして城砦を掌中に収めた。敗走した敵兵はフェルトレ市の前に陣を構えていた友軍に合流し、いずれの配下にあるとも知れぬ大軍が襲来したことを告げた。これを聞くや、包囲軍は夜の間にフェルトレ市から兵を引き払った。その翌日、わが軍はプリミエーロからアーゴルドへ向う途上で敵陣を突き抜け、さらにアーゴルドから息つくひまもなくベッルーノ市へと進撃した。そして、余と気脈を通じていたアンディゲトゥス<sup>34)</sup>の許に使者を遣わし、余が軍勢を引き連れベッルーノ市の間近に迫っていることを報らせた。アンディゲトゥスは直ちに軍事と市政の指導者たちの許に駆け付けて、「それがしのところに使者たちが参り、われらの主君マステイーノ・デツァ・スカラと盟友であるキアラモンテの伯たちが大軍を率いて敵軍を蹴散らしわれらの救援に馳せ参じたとの口上でございます」と、伝えた。市の指導者たちは喜び、わが軍を味方の軍勢と信じ込んで市の城門を開けた。こうして余が城門から市内に侵入したのは、聖プロコピウスの日、7月4日のことだった。全軍が入城し終えると、余はチェコ王国とティロール伯領の軍旗を掲げた。敵軍であると気付くや、市民たちは周章狼狽してなすところを知らず、わが武力に抗うことなどなしえなかった。こうして、神の御加護により、ベッルーノ市はわが手に帰した。城砦のみは数日間われらに抵抗したが、地下に坑道がうがたれると、城砦内の守備兵も城砦をわれらの手に明け渡すに至った。

続いて、余は軍勢をフェルトレ市の前に導いた。ヴェローナ人とヴェネーツィア人は相

手のことで忙殺され、そのため余とわが軍に仇なす余力はなく、むしろ自分たちの陣営に引き込もうと、どちらもが余との協議を画策した。わが軍がフェルトレ市を包囲すること6週間<sup>35)</sup>に及んだのち、余はヴェネーツィア人との提携に踏み切った。マステイーノ・デッラ・スカラに対するこの度の戦争に総力をあげて余を援助することで、ヴェネーツィア人は余と同盟した。そこで、ヴェネーツィア人は兜武者七百と多数の歩兵を自らの費用で募り、それを余の許に遣わした。

一方、わが弟を軍勢とともにその地に残して余はヴェネーツィアに赴き<sup>36)</sup>、この上もなく丁重に迎えられ手厚い接待を受け、相互の同盟を磐石にした。それからフェルトレ市に取って返し、余は兵糧攻めによってこの市<sup>まち</sup>を攻略した<sup>37)</sup>。

パードヴァでもカッラーラ家の人々<sup>38)</sup>が余と通謀し、パードヴァ市を制圧してマステイーノの兄アルベルト<sup>39)</sup>を取り押え、捕虜としてヴェネーツィア人に引き渡した。そして、わが家臣たちが市内に残り、パードヴァ市を支配下に置くことになった。なお、フェルトレ、ベッルーノの両市と両市の城砦にも、余はわが家臣たちを派遣してその軍司令官に任じた。すなわち、フェルトレ市にはティロール伯領の大身であるfolkマル・フォン・ブルクシュタルを、ベッルーノ市にはアンディゲトウス・デ・ボンガージョを軍司令官に任じ、また、ヴェローナ人に対する戦争の指揮官にはヤン・ズ・リベーを据えたが、ヤンがその任に就いて7日目に急逝したので、その後任にズビニェク・ザイツ<sup>40)</sup>を起用した。こうしたのち、余はティロール伯領に戻り、さらにイン河谷を進んで、チェコ王国に帰った。そして、オーストリア公たち<sup>41)</sup>とも同盟を結んだ。これまで、余は彼らと敵対していたからだ<sup>42)</sup>。

その冬の四旬節に<sup>43)</sup>、余は長女のマルグレーテをハンガリー国王カーロイ<sup>44)</sup>の嫡男

ラヨシュ<sup>45)</sup>に嫁がせ<sup>46)</sup>、どんな相手に対しても互いに手を結ぶことになった<sup>47)</sup>。

その後、わが義弟<sup>48)</sup>が翌日の晩い朝食に余を招いてくれた日のことだ<sup>49)</sup>。払暁、兵卒の一人が余の眠りを覚まして、「殿下、お目覚め下され。最後の審判の日がやって来ました。天地を隈なく蝗の大群が覆っております」と、急を告げた<sup>50)</sup>。起きるが早いのか、余は馬に跨がり、蝗の群が何処まで続くか見極めようと、プルカウ<sup>51)</sup>まで馬を疾駆させると、そこで群がとぎれていた。群の連なりは7マイルに及ぶが、その広がり、まったく見当がつかなかった。蝗の鳴声は騒々しいざわめきとしか聞こえず、その翅はあたかも黒く文字を書きつらねたようで、群は吹雪の如くぎっしりと空を埋め、そのため太陽が見えぬ程だった。蝗の発する悪臭はすさまじかった。大群の一部はバイエルン方面に、一部はフランケン方面に、一部はロンバルディーア方面に向い、残りもそこから地上の至るところへ分散していった。蝗のつがいは一晩で20個以上の卵を産むのだから、その繁殖力は尋常ではない。幼虫は小さいのだが瞬く間に成長し、3年もの間、蝗の見られぬ年はなかった。

その頃だ。2か月の間に、わが妹と義弟のオーストリア公が相次いでこの世を去った<sup>52)</sup>。だから、蝗の襲来した折が、余と二人との今生の別れとなった。

#### 4. ハプスブルク家の興隆

現在のスイス北部アールガウ州でアーレ川とロイス川が合流するあたりに、ハプスブルク城が立っている。〈ハプスブルク〉とは〈鷹の城〉という意味で、創建は1020年に遡り、その城主一族のハプスブルク家という家名は、この城に由来する。ハプスブルク家の起源は伝説の霧に包まれて定かでないが、同家が歴史の記録に登場するのは城が建設され

た11世紀前半で、1108年にはハプスブルク伯という呼称が初めて文書に現われる<sup>53)</sup>。

帝国南西部のシュヴァーベンに伯として歴史の表舞台に登場したハプスブルク家の権力基盤は、ライン川上流域にあった。その領地と守護権（フォークタイ）の及ぶ範囲は、ハプスブルク城を中心とするスイス北部、ライン川左岸の上エルザス（アルザス南部）、そして、その対岸のブライスガウに広がっていた<sup>54)</sup>。その支配圏は、山がちとはいえ、当時のヨーロッパ世界の中心部にあり、北からイタリアへと向かうアルプス越えの要衝の地を占めていた。

ハプスブルク家が歴史の主役に躍り出る端緒となったのは、大空位時代に終止符を打つ1273年の国王選挙であった。この選挙で国王に選ばれたのが、ハプスブルク王朝の始祖となるルードルフ1世（1218-1291）である。有力候補者を差し置いて、帝国諸侯でもない一介の地方伯が国王に選出されたことは、時人にとって青天の霹靂だったにちがいない。真偽のほどは定かでないが、ルードルフ本人にとってさえ、寝耳の水の僥倖だったと伝えられている<sup>55)</sup>。しかし、ルードルフの選出は、必ずしも予期せぬ番狂わせではなかった。帝国内には大空位時代以前のシュタウファー朝に忠節を尽くした領主が多く、ハプスブルク家はそうした領主たちの代表と目されていた。シュタウファー家の皇帝とローマ教皇が敵対した折に、教会から破門に処せられても、ハプスブルク家はシュタウファー家への忠勤を貫き、シュタウファー朝最後の皇帝フリードリヒ2世自らがルードルフの洗礼においてその代父となったと伝えられる<sup>56)</sup>。大空位時代以前から帝国領の大半を掌握していたのはこうしたシュタウファー家に奉仕した領主たちで、彼らの支持がなければ帝国を統治するのは困難であり、ハプスブルク家はこうした支持を集めるのに最も適した一族だったのである<sup>57)</sup>。

それだけではない。ルードルフは国王選出以前に粘り強く精力的に家領拡大政策を推し進めた。1220年代にアルプス山脈をイタリアに抜けるザンクト・ゴットハルト峠が開通し、ハプスブルク家の支配圏は交易路として格段に重要性を増した<sup>58)</sup>。ルードルフは、ライン川上流域に散在する所領をひとつにまとめ上げて、その合併した領地に一円支配を貫徹する新たな領邦国家の形成を目指したのである。時には武力に訴えることも辞さなかったこの試みは自身の国王選出によって中断を余儀なくされるが、その事業を通じて、ルードルフは、勇猛果敢な不屈の戦士、行政手腕に秀でた老練な為政者という評判をかちえ、さらに、その飾らない気さくな人柄が人々を魅了した。選帝侯たちはこうした有能なルードルフの手腕に帝国の再建を期待すると同時に、この一介の地方伯なら自分たちを凌駕する力を持ち得まいと判断した<sup>59)</sup>。こうしてハプスブルク家最初の国王ルードルフ1世（在位1273年-1291年）が誕生する。

ルードルフ1世が、国王として最も精力を注ぎ、しかも後世に絶大な影響を及ぼすことになったのは、帝国資産と権利の回復政策（Revindikationspolitik）であった。これは、シュタウファー朝の皇帝フリードリヒ2世が廃位に追いやられた1245年以降、実質的な国王不在の混乱に乗じて非合法的に横奪され、あるいは、選帝侯の大多数の同意なくして恣意的に略取された帝国資産と権利の回復を目指す政策である<sup>60)</sup>。ルードルフはこの政策をもって王権の基盤の再建と、大空位時代の紊乱の収拾を図り、帝国内に安定と秩序をもたらそうとしたのである。帝国北部では、ザクセン大公やブランデンブルク辺境伯のような有力諸侯がこの政策の遂行を委ねられ、ハプスブルク家の家領がある帝国南西部では、国王によって任免可能な帝国地方総監（Reichslandvogt）たちが管轄区を割り当てられて帝国資産の回収とその管理を託され



た<sup>61)</sup>。問題は、帝国東部である。そこには、ルードルフの行く手に大きく立ちはだかる帝国最強の難敵がいた。チェコ国王プシェミスル・オタカル2世（在位1253年—1278年）である。

ヨーロッパ随一の産出量を誇る銀山を擁し、その圧倒的な財力を背景にプシェミスル王朝治下のチェコ王国を強盛へと導いたのがプシェミスル・オタカル2世である。大空位時代におけるドイツ王権の凋落がチェコ王国の躍進を招来したのだが、オタカルが中央ヨーロッパに雄飛する直接のきっかけを与えたのは、オーストリア公領におけるパーベンベルク家の断絶であった。この公領をめぐる周辺の諸勢力が争い、オーストリアの貴族の支持を得たオタカルが公位を手中に収め（1251年）、さらに、やはりパーベンベルク家の遺領であったシュタイアーマルク公領をハンガリー王国との争奪戦の末に支配下に収めた（1260年）。その南にはケルンテン公領とクライン公領があったが、従兄弟からこの二つの公領を相続し（1269年）、オタカルの勢力はついにアドリア海北岸に及ぶ。こうして、オタカルは帝国東部の大部分を支配する覇王となったのである。ところで、オタカルが傘下に収めた諸領邦は、いずれも帝国の知行地であった。それらを合法的に領有するには、国王への臣従と、見返りとしての国王による安堵を必要とする。実質的な国王不在の大混乱に乗じてなされたオタカルによる諸領邦の獲得は、こうした正規の手続きを欠いていた。それゆえに、ルードルフの推進する帝国資産と権利の回復政策と真っ向から衝突する。つまり、ルードルフの政策の最大の狙いは、当初から、王権をはるかに凌ぐ強大な勢力を築き上げたチェコ王国の覇王オタカルの打倒だったのである。

オタカルは、強固な権力基盤をもつ自らこそが国王にふさわしいと自負していた。ところが、その強大さゆえに選帝侯たちに忌避さ

れ、しかも、自身が選帝侯の一人であるにもかかわらず、1273年の国王選挙には招集されることさえなく、大空位時代に幕を下ろすこの重要な選挙で、一人蚊帳の外に置かれた。ルードルフなど眼中にないオタカルは、新国王をみすばらしい弱小領主と見くぶり<sup>62)</sup>、再三の臣従要請を拒絶した。しかし、オタカルは、老獪で果敢なルードルフの手腕と行動力を見誤った。ルードルフは尊大に構えるオタカルを帝国追放に処し（1274年）、チェコ王国を含むオタカルの全所領の没収を宣した。両者の対決の行方は、戦場で決する。1278年、ウィーン北方のマルヒフェルトが、最終決戦の地となった。オタカルに宿怨を抱くハンガリー軍がルードルフの援軍に駆けつけ、ルードルフが激戦を制し、オタカルは冷たく戦場に骸をさらした。

帝国には授封強制という原則がある。没収した帝国知行地は帝国に編入できず、他の領主に没収地を再授封しなければならないという原則である。この原則が帝国領拡大による王権の基盤強化を妨げたのであり、ルードルフもオタカルからの没収地に関して、本来ならこの原則を適用しなければならなかった。しかし、ルードルフは勝利による戦果を授封強制の犠牲にすることを望まず、この輝かしい戦果を自家の家門勢力拡大のために利用した。オタカルの長子ヴァーツラフ2世にチェコ王国の相続を認め、ケルンテン公領はこの度の勝利に著しい武功があったティロール伯のゲルツ家に授封したが、ルードルフはオーストリア、シュタイアーマルク、クラインを手放す意図を当初から持っていなかった。ウィーンに4年間滞留して占領地における人心の掌握に努め、持ち前の行政手腕を発揮してその地の統治機構を整備した<sup>63)</sup>。いわば、ハプスブルク家による支配を既成事実化したのである。選帝侯たちの不満を抑え、1282年、ルードルフは、二人の息子アルプレヒトとルードルフに、共同領有というかたちで新

たな征服地を授封した。ハプスブルク家では長子相続制がまだ確立せず、息子たちすべてが家領を獲得するという原則が維持されていたのである<sup>64)</sup>。ところが、オーストリア諸州の領邦諸身分は共同領有という慣習に馴染めず、長子のアルブレヒトのみによる単独領有を強く望んだ(1283年)。こうして、オーストリア、シュタイアーマルク、クラインは、正式に、ルードルフの嫡男アルブレヒトの手に帰したのである。

ライン川上流域の地方伯にすぎなかったハプスブルク家は、ルードルフ一代で、帝国の東部に広大な支配圏を築き上げた。ルードルフ1世はハプスブルク王朝の始祖となりながら、のちのハプスブルク・ドナウ帝国の定礎者ともなったのである。だが、ハプスブルク家隆昌の道を切り拓いたこのルードルフが、どうしてもなしえなかったことがある。シュタウファー王朝に続く、ドイツ第4の世襲王朝の樹立である。

## 5. ハプスブルク家の蹉跌

大空位時代の混乱を脱した帝国の再建は、世襲王朝による王権の安定にかかっていた。しかし、それは国王選出の鍵を握る選帝侯たちの思惑に左右される。帝国東部に強固な家門勢力を築いたルードルフがそれを王権強化の礎にしようとする目論みでも、それを実現するには嫡子アルブレヒトに王位を継承させることが不可欠であった。ところが、ハプスブルク家は強大になりすぎた。今や選帝侯たちをも凌ぐ力を手に入れるに至った。強大なアルブレヒトは、選帝侯たちにとって脅威でしかない。かくして、ルードルフの死後、選帝侯たちが国王に選出したのは、アルブレヒトではなく、かつてのルードルフよりもさらに弱小な領主アードルフ・フォン・ナッサウ(在位1292年-1298年)であった。

アードルフ選出の裏には、選帝侯たちの利

己的な打算があった。無力な新国王を、自らの勢力拡大のために利用しようとする身勝手な思惑である<sup>65)</sup>。だが、アードルフは、選帝侯たちに唯々諾々と従う無能な傀儡ではなかった。ルードルフ同様、アードルフもまた、王権の強化を自家の家門勢力拡大に求める。アードルフが狙いを定めたのは帝国中部で、マイセンとテューリンゲンの相続問題に介入し、最終的には武力で両領邦を自家の勢力下に置いた。こうしたアードルフの強引な手法は、諸侯たちの反発を買う。アードルフ打倒の同盟が結成され、その先頭に立ったのはハプスブルク家のアルブレヒトであった。アードルフは廃位され、同盟軍との戦いで敗死する(1298年)。同盟軍の指揮をとったハプスブルク家の当主は、アルブレヒト1世(在位1298年-1308年)として新国王に選出された。

父王ルードルフ1世の衣鉢を受け継いだアルブレヒトは、父王に勝るとも劣らぬ政治的手腕の持ち主であった。その短い在位期間中にアルブレヒトが追求したのは、ハプスブルク家による世襲王朝の樹立と家門勢力の拡大で、目的達成のために発揮されるその辣腕ぶりは冷徹無比で、気さくな人間味を持ち合わせた父王とは対照的に、人を容易に寄せ付けぬ陰鬱なその性格は人々に嫌悪と畏怖の念を抱かせた<sup>66)</sup>。帝国西部では、隣国フランスの進出に譲歩するアルブレヒトに不満を抱いたライン川沿いの選帝侯たちの反乱を制圧し、帝国中部では、マイセンとテューリンゲンに家領拡大の機を窺い、帝国東部では、1306年にチェコ王国でプシェミスル家が断絶すると、その王位に嫡男ルードルフを据えた。しかし1年足らずでルードルフが病死するとチェコ王国の獲得は断念を余儀なくされ、また、マイセンでも派遣した軍勢が手痛い敗北を喫した。こうして事業が暗礁に乗り上げ中、突然の悲劇がハプスブルク家を襲った。長子相続制が確立していないハプス

ブルク家では遺産は兄弟間の共同相続が原則であったが、新たに獲得されたオーストリアなどの帝国東部の諸領邦に関する1283年の取り決めは、アルブレヒトのみがそれらを単独で領有することを決定した。この決定に不満を募らせたのが、アルブレヒトの弟ルードルフの息子ヨーゼフである。ライン川上流域にあるハプスブルク家の本領地に立ち寄った伯父をヨーゼフは待ち伏せ、突然、暗殺という凶行に及んだ。甥の凶刃で非業の死をとげたアルブレヒトは、事業の継続を息子たちに託した。

しかし、アルブレヒトの横死後、選帝侯たちは、ハプスブルク家にとってまたしても期待外れの選択をした。1308年、ハプスブルク家の勢威を恐れた選帝侯たちは、帝国西端のルクセンブルク伯ハインリヒを国王に選出したのである。ここにルクセンブルク家が、帝国の政局の表舞台に登場する。カール4世の祖父である国王ハインリヒ7世（在位1308年—1313年）は、ドイツ国内での対立を極力避け、イタリア遠征（1310年—1313年）とローマでの皇帝戴冠にその精力のほとんどを注いだ。シュタウファー朝断絶後の半世紀以上に亘って実施されなかったこのイタリア遠征は、イタリアの秩序回復を切望するダンテのような詩人には熱烈に歓迎され、帝冠を戴くことに成功したものの、都市国家間の果てしない抗争に巻き込まれて疲労困憊し、イタリアの地で不帰の客となった。異郷で客死したハインリヒがルクセンブルク家に遺した最大の功績は、嫡子ヨーハンをチェコ国王に据えることに成功したことである（1310年）。ヨーハンによるチェコ王位獲得こそ、ルクセンブルク家をハプスブルク家に対抗しうる最有力家門に押し上げた要因である。

ハインリヒ客死後の国王選挙は、混乱をさわめた。ハプスブルク陣営とルクセンブルク陣営が別々に候補者を擁立して相譲らず、1314年の国王選挙は、同時に二人の候補者を

国王に選出するという二重選挙に終わった。ハプスブルク陣営が押し立てたのは、アルブレヒト1世の息子たちの中で最年長のフリードリヒ美公で、ルクセンブルク陣営が擁立したのは、オーバーバイエルン大公ルートヴィヒであった。ハプスブルク陣営のフリードリヒは威風堂々としたその体躯から美公と綽名され、父王からオーストリアとシュタイアーマルクを継承していた。一方、ルクセンブルク陣営が担ぎ出したルートヴィヒはミュンヘンを拠点とするヴィッテルスバッハ家の出身で、幼弱であったニーダーバイエルン大公の後見権をめぐるハプスブルク家と争い、ガメルスドルフの戦い（1313年）でその軍勢を撃破して一躍勇名を轟かせた。ハインリヒ7世の後継者であるチェコ国王ヨーハンが未だ若すぎたため、ルクセンブルク陣営はハプスブルク家の対抗馬として武勲に輝くルートヴィヒに白羽の矢を立てたのである。この国王ルートヴィヒ4世（在位1314年—1347年）の登場により、帝国は、ハプスブルク家、ルクセンブルク家、ヴィッテルスバッハ家が鎬を削る有力三家門の鼎立時代に突入する。

二重選挙に始まる帝国内の動乱は、8年余り続く。この動乱に終止符を打つのは、二つの会戦であった。動乱の主役は、勿論、ハプスブルク家とそれに敵対するヴィッテルスバッハ、ルクセンブルク両家の同盟だが、同盟側を側面から援助したもう一つの勢力があった。ハプスブルク家の本領地近くに成立したスイス誓約同盟である。現在のスイスの起源となったこの誓約同盟は、国王ルードルフ1世の死の直後、1291年に、ウーリ、シュヴィーツ、ウンターヴァルデンの森林三州によって結成され、外部の裁判権力の介入を排し、相互扶助、治安維持、自衛を目的に自治運営される平和共同体である<sup>67)</sup>。同盟は近接するハプスブルク家の支配が及ぶことを恐れ、ハインリヒ7世のようなハプスブルク家以外の国王から帝国直属の特権を得て、そ

の自由と自治を守り抜こうとした<sup>68)</sup>。1314年の二重選挙で帝国が二つの陣営に分裂すると、誓約同盟はいち早くルートヴィヒ陣営につき、支配圏の拡大を図るハプスブルク家と自由を死守しようとする誓約同盟との間に、軍事的衝突の火蓋が切って落とされる。両者の激闘は以後2世紀余り続くが、その緒戦となったのが1315年のモルガルテンの戦いである。ハプスブルク軍を率いたのはライン川上流域の本領地を継承したフリードリヒの弟レオポルトで、その騎兵軍が山中の隘路に差しかかるところを、誓約同盟の歩兵軍に襲撃されて歴史的な大敗を喫した。この戦いは、農民歩兵軍が重装騎兵軍に勝利した代表例として後世に語り継がれる。ルートヴィヒは、戦いの翌年、誓約同盟に帝国直属の特権を付与して、その戦功に報いた。

フリードリヒ美公とルートヴィヒ4世との間には、しばらく膠着状態が続いた。両者の抗争に決着をつけたのは、1322年のミュールドルフの戦いである。ルートヴィヒとチェコ国王ヨーハンの連合軍に、フリードリヒは弟レオポルトの援軍を待たずに決戦を挑んだ。その結果が、フリードリヒの惨敗である。フリードリヒは戦場で捕虜となり、とある城に幽閉された。ミュールドルフの敗戦は、ハプスブルク家の歴史の大きな転換点となった。始祖ルードルフ1世以来3代にわたって追い求めてきた世襲王朝樹立の試みが最終的に挫折したことを意味するからである。ハプスブルク家が再び帝国の王位に返り咲くのは、1世紀ほど時を経た1438年のことである。

フリードリヒの幽閉後も弟レオポルトを中心とするルートヴィヒ打倒の策動は続いたが、1325年に、一応の決着をみる。フリードリヒは王位請求権を最終的に放棄する代わりに、帝国知行地の家領をルートヴィヒに安堵され、さらに、帝国を共同で統治する共治王に祭り上げられた。共治王とはもちろん名ばかりで、政局の前面に出ることはなく、フ

リードリヒは、1330年、オーストリアの地で没した。

ハプスブルク家とヴィッテルスバッハ家の和解が進む中、帝国内の勢力図に劇的な変化が生じた。それをひき起こしたのは、チェコ国王ヨーハンの性急な家門勢力大政策である。

ヨーハンは長男カールをフランスのヴァロワ家の姫君と結婚させてフランス王国と同盟関係を築き、長女をニーダーバイエルン大公に嫁がせ、次男ヨーハン・ハインリヒをケルンテン公領とティロール伯を兼有するゲルツ家のハインリヒ6世の相続娘と結婚させて両領邦のルクセンブルク家への帰属を確定させた。さらにポーランド王位への請求権を掲げてポーランド南部に攻め入り、シロンスク(シュレージエン)地方を実質的に併合する。フランス王国の強力な後ろ楯を背景に、帝国東部においてルクセンブルク家の広大な勢力圏を築くのがヨーハンの狙いであった。国王をも凌ぐヨーハンの勢力伸長によって、同盟関係にあったヴィッテルスバッハ家とルクセンブルク家との間に深刻な亀裂が生じた。

フリードリヒ美公没後、アルブレヒト2世(位1330年—1358年)がハプスブルク家の当主となった。この新当主はフリードリヒの弟で本来は聖職に就くことが予定されていたが、やはりフリードリヒの弟であるレオポルトが1326年に死去したのち、ライン川上流域の領地を継承し、美公亡きあとはオーストリアとシュタイアーマルクを継承してライン川上流域の領地はもう一つ下の弟オットーに託した。ただし、オットーは1339年に没し、それ以後アルブレヒト2世がハプスブルク家の全所領を単独で治めた。アルブレヒトは病気で(一説によると毒を盛られて)身体の一部が麻痺し自分では歩行できなかったので<不具者>とあだ名されるが、聖職者になるための教育を受けたために人並外れた教養があり<賢者>とも称される<sup>69)</sup>。好戦的だった父







## 註

- ※ 翻訳に際して底本としたのは、従来どおり、E. Hillenbrand, *Vita Caroli quarti—Die Autobiographie Karls IV.*, Stuttgart, 1979. である。なお、今回は地名の表記や位置に関し、チェコ語訳の、J.Pavel, *Karel IV . Vlastní Životopis*, Praha, 1978.、英語訳の、P.W.Knoll, F.Schaer, *Autobiography of Emperor Charles IV and his Legend of St.Wenceslas*, New York, 2001.、フランス語訳の、P.Monnet, J.-C. Schmitt, *Vie de Charles IV de Luxembourg*, Paris, 2010.、を参考にした。
- 1) 1336年4月1日。カールは、弟のティロール伯ヨーハン・ハインリヒが14歳と弱年のため、父王のチェコ国王ヨーハンから弟の後見を託され、1336年1月、ティロール伯領の後見統治に着手した。
  - 2) ヨーハン・ハインリヒ (1328~1338年)。1335年6月に、ハプスブルク家のオーストリア公フリードリヒ1世 (美公) の娘アンナと婚約した。この婚儀の成立で、ヨーハン・ハインリヒとゲルツ伯領はハプスブルク家の庇護下に入ることを義務づけられた。
  - 3) 1336年4月24日。
  - 4) ハプスブルク家のオーストリア公オットー (在位1330~1339年)。フリードリヒ美公亡きあと、兄のアルブレヒト2世 (在位1330~1358年) はオーストリアとシュタイアーマルクを治め、弟のオットーはライン川上流域のハプスブルク家領を継承した。
  - 5) バイエルンのヴィッテルバッハ家出身の皇帝ルートヴィヒ4世 (在位1314~1347年)。
  - 6) 註4) を参照。
  - 7) スカーラ家のマステイーノ2世 (1308~1351年)。1329年から1351年にかけて、シニョーレとしてヴェローナ市を支配した。
  - 8) 1336年12月にトレント司教に選出された。
  - 9) ティロール伯ヨーハン・ハインリヒ。註1) のように、カールはこの弟の後見人であった。
  - 10) 1336年11月にブリクセン司教に選出された。
  - 11) 1336年8月。
  - 12) ニーダーバイエルン大公ハインリヒ2世 (在位1334~1339年)。1328年にカールの姉マレグレータ (1313~1341年) を妻に迎えていた。
  - 13) ドナウ河支流のイーザル川。
  - 14) 1336年の8月6日から、ヨーハンとルートヴィヒの軍勢は、12日間、イーザル川を挟んで対陣した。
  - 15) ニーダーバイエルン。バイエルン大公領は、1255年、西部のオーバーバイエルンと東部のニーダーバイエルンに分割された。註12) のハインリヒ2世の死後、1340年、オーバーバイエルン大公でもあった皇帝ルートヴィヒ4世によって、両大公領は統合された。
  - 16) イン川に沿って、インスブルックの南西65キロの地点にある。
  - 17) 皇帝ルートヴィヒ4世の嫡男ルートヴィヒ5世 (1316~1361年)。ルートヴィヒ4世によってブランデンブルク辺境伯 (在位1324~1351年) に封じられ、父帝没後は、バイエルン大公位 (在位1347~1361年) を継承した。
  - 18) 1336年9月29日。和睦が正式に成立したのは、1336年10月9日。
  - 19) カールの妹のアンナ (1323~1338年)。1335年、ハプスブルク家のオーストリア公オットーに嫁いでいた。
  - 20) カールの弟ヨーハン・ハインリヒは、1330年、ケルンテン公にしてティロールであったハインリヒ6世 (1270~1335年) の相続娘マルグレーテ (1318~1369年) と結婚し、ハインリヒ亡きあと、ケルンテン公領とティロール伯領を相続した。ところが、この相続を反故にするため、ヴィッテルスバッハ家の皇帝ルートヴィヒ4世とハプスブルク家の兄弟は密約を交わし、1335年、ヴィッテルスバッハ家がティロール伯領を、ハプスブルク家がケルンテン公領を奪取することを画策した。ティロール伯領はヨーハン・ハインリヒの手に留まったが、ケルンテン公領はハプスブルク家の所有に帰した。ここで語られる和議は、い

- くらかの代償と引き換えに、ルクセンブルク家が、ハプスブルク家によるケルンテン公領領有を認めたもの。
- 21) 1336年12月28日。
- 22) 当時、異教徒リトアニア人を討つための遠征は、ヨーロッパ各地の諸侯にとって、一種気晴らしのような慣例行事になっていた。
- 23) ヴィレム4世 (1307～1345年)。
- 24) アドルフ8世 (1308～1348年)。
- 25) 1337年4月。
- 26) アドリア海。
- 27) クロアチアの島。
- 28) ハンガリー王権の下、クルク島で勢威を振るった有力貴族フランコパン家の出身。
- 29) チェコ王国の名門貴族
- 30) ベルトランド (在位1334～1350年)。
- 31) 註1) を参照。
- 32) 1337年6月。
- 33) ラテン語原文は *advocatus*。中世イタリアの都市国家コムーネで、行政・司法・軍事などの最高指導者。コムーネ内部の利害対立や政治抗争に対して、公正と中立を保つためコムーネ外部から行政的手腕にたけた名望家が招聘されることが多く、任期は短かった。
- 34) アーゴルドを支配していた貴族。
- 35) 既出のストラキウス・デ・ボンガージョと同一人物と思われる。
- 36) 1337年の7月から8月にかけて。
- 37) 1337年8月15日に、カールはヴェネツィアに到着した。
- 38) 1337年8月30日。
- 39) マルシーリオ・ダ・カッラーラとその一族で、1337～1338年にパードヴァを支配した。
- 40) アルベルト・デッラ・スカウラ2世 (1306～1352年)。
- 41) チェコ王国でカールの侍従長を務めていた。
- 42) 註4) に記したアルブレヒト2世とオットーのこと。
- 43) 註18) に記したとおり、チェコ国王ヨーハンとオーストリア公たちとの和睦は1336年10月9日に成立した。カールが記すオーストリア公たちとの同盟は、この和睦を示唆したもののか。とするなら、カールによるロンバルディーア諸都市の攻略が1337年夏に行われたのだから、カールの記述は時間の前後関係に関して誤記ということになる。
- 44) 1338年の冬。
- 45) ハンガリー王国のアンジュー王朝初代の国王ローベルト・カーロイ1世 (在位1308～1342年)。
- 46) のちのハンガリー国王ラヨシュ1世 (大王) (在位1342～1382年)。
- 47) マルガレーテ (1335～1349年) は1338年にラヨシュと婚約したが、実際の結婚は1345年になってからのことである。マルガレーテはわずか14歳で子なくして早世した。
- 48) 1338年3月。
- 49) カールの妹アンナが嫁いだオーストリア公オットー。
- 50) 1338年7月28日。
- 51) 当時の記録によれば、1338年7月から8月にかけて、帝国南部とアルプス地方を蝗害が襲った。
- 52) ウィーン北西の都市。
- 53) カールの妹アンナは1338年11月3日に、その夫君のオーストリア公オットーは1339年2月17日に身罷った。2か月の間というカールの表記は正確ではない。
- 54) K-F.Krieger, *Die Habsburger im Mittelalter*, Stuttgart, 1994, S.14.
- 55) *Ibid.*
- 56) 江村洋『ハプスブルク家』講談社現代新書 1990年 23頁。
- 57) K-F.Krieger, *op.cit.*, S.21.
- 58) *Ibid.*, S.18,
- 59) *Ibid.*, S.15.
- 60) H. Grundmann, *Wahlkönigtum, Territorialpolitik und Ostbewegung im 13. und 14. Jahrhundert in: Handbuch der deutschen Geschichte Bd. I*, S.390.

- 60) K.F.Krieger, *op.cit.*, S.34.
- 61) H.Grundmann, *op.cit.*, S.390.
- 62) *Ibid.*, S.392.
- 63) *Ibid.*, S.393.
- 64) アーダム・ヴァントルツカ 『ハプスブルク家』  
江村洋訳 谷沢書房 1981年 50頁。
- 65) H.Grundmann, *op.cit.*, S.403-404.
- 66) アーダム・ヴァントルツカ 前掲書 74頁。
- 67) 瀬原義生 『精説スイス史』 文理閣 2015年  
43-46頁。
- 68) H.Grundmann, *op.cit.*, S.402.
- 69) アーダム・ヴァントルツカ 前掲書 86頁。